

世界を動かす

ケネディが求めた 平和への道

ジェフリー・サックス

櫻井祐子 [訳]

To Move the World

JFK's Quest for Peace

Jeffrey Sachs



世界を動かす

ケネディが求めた 平和への道

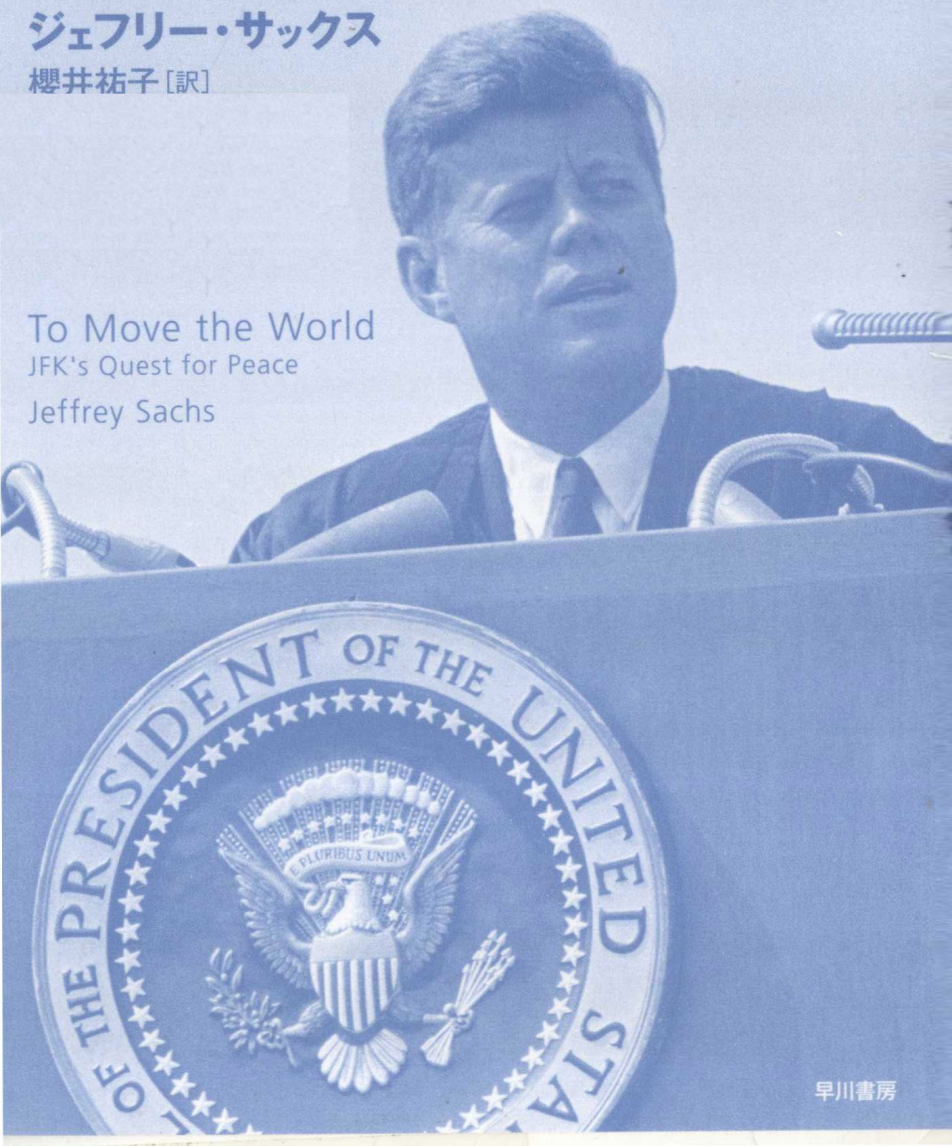
ジェフリー・サックス

櫻井祐子 [訳]

To Move the World

JFK's Quest for Peace

Jeffrey Sachs



世界を動かす—ケネディが求めた平和への道—

2014年5月10日 初版印刷

2014年5月15日 初版発行

＊

著 者 ジェフリー・サックス

訳 者 櫻井祐子

発行者 早川 浩

＊

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

＊

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 03-3252-3111（大代表）

振替 00160-3-47799

<http://www.hayakawa-online.co.jp>

定価はカバーに表示してあります

ISBN978-4-15-209455-1 C0031

Printed and bound in Japan

乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取りかえいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製
は著作権法上の例外を除き禁じられています。

◆◆
目次

序章
7

第1章
平和の希求
14

第2章
瀬戸際
42

第3章
平和の前触れ
58

第4章
平和のレトリック
72

第5章
平和演説
98

第6章
平和のための闘い
126

第7章

条約の批准

153

第8章

ケネディによる平和のための闘いの歴史的意義

183

第9章

足場を定めよう

205

謝辞

223

解説

ジョン・F・ケネディの歴史的評価とその可能性

久保文明

226

原注

243

参考文献

247

ケネディ演説集

356

＊本文中ではケネディの発言の引用部分の中ゴシックで示した（編集部）。

世界を動かす――ケネディが求めた平和への道――

日本語版翻訳権独占
早川書房

©2014 Hayakawa Publishing, Inc.

TO MOVE THE WORLD

JFK's Quest for Peace

by

Jeffrey D. Sachs

Copyright © 2013 by

Jeffrey D. Sachs

All rights reserved.

Translated by

Yuko Sakurai

First published 2014 in Japan by

Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan by

arrangement with

The Wylie Agency (UK) Ltd.

through The Sakai Agency.

扉写真：「平和のための戦略」演説を行なうケネディ大統領（1963年6月10日）

©Bettmann/CORBIS/amanaimages

装幀・本文フォーマット：折原カズヒロ

シエナに捧ぐ

誰もが孫たちの将来を気にかけている

◆◆
目次

序章
7

第1章
平和の希求
14

第2章
瀬戸際
42

第3章
平和の前触れ
58

第4章
平和のレトリック
72

第5章
平和演説
98

第6章
平和のための闘い
126

第7章

条約の批准

153

第8章

ケネディによる平和のための闘いの歴史的意義

183

第9章

足場を定めよう

205

謝辞

223

解説

ジョン・F・ケネディの歴史的評価とその可能性

久保文明

226

原注

243

参考文献

247

ケネディ演説集

356

＊本文中ではケネディの発言の引用部分の中ゴシックで示した（編集部）。

序 章

「いつも人の話を聞いていない馬鹿者がいる」。ジョン・F・ケネディはいらだたしげに叫んだ。一九六二年一〇月のキューバ・ミサイル危機のさなか、大統領と側近たちが一堂に会していたと、きのことだ。アメリカとソヴィエト連邦は、核戦争の危機に瀕していた。ケネディはいらぬ挑発で武力戦争を招かぬよう、U・2偵察機の飛行停止を命じた。しかしアラスカ軍基地のあるパイロットは、命令を聞いていなかった。ソ連が核実験をしていないかどうかを調べる目的で、大気サンプルを採取するために飛び立つてから、方向感覚を失い、図らずもソ連領空を侵犯してしまったのだ。これを受けて、ソ連の戦闘機がU・2機を迎撃するために緊急発進した。また同機を基地まで護送するために派遣されたアメリカ軍機は、この危機で敷かれた厳戒態勢のもとで核弾頭を搭載し、それを発射する権限を与えられていた。世界が生き延びたのは紙一重だった。²

この殺伐とした時代、人類の運命は首の皮一枚でつながっており、世界はまさに自己破壊の瀬戸際にあった。あれから五〇年たったいま当時をふり返ると、もはや存在すらしない問題や信念

に、人類がすべてを注ぎこもうとしていたとは想像もできないし、とても信じられない。二超大国の一方は、もう存在しない。共產主義の世界的拡大という大義は、その提唱者自らによって二〇年以上前に放棄され、廃れて失敗に終わった概念である。キューバとベルリンの政治は、冷戦中の最も厄介な対立点だったが、いまでは人類が生存を賭けるべき問題には到底思えない。

このように、今日の状況下ではほとんど意味をなさない闘争を、私たちは「もうどうでもいい」と片づけがちだ。しかしこの歴史に背を向けてはならない。二超大国が世界の全滅を招きかけたこと、それだけでなく、それぞれが数千発の核弾頭を製造し、第二次世界大戦中に投下されたすべての爆弾を合わせたよりも大きな破壊力を有していたことを、理解しておかなくてはならない。また超大国の対立が、実は「冷戦」と呼べるような代物しろものではなかったことを忘れてはならない。この対立は多くの「代理戦争」を招き、いくつもの大陸で数百万人の命を奪ったのだ。いまでは核弾頭の数減り、一触即発の交戦規定は廃止されたとはいえ、私たちはいまでも冷戦が生み出した世界に暮らし、数千発の核弾頭に脅かされながら生きている。なぜ冷戦を理解しなくてはいけないのか。それは、冷戦を生み出した人間の本能と政治体制が、世界に対するわが国の姿勢と、諸外国の戦略を、いまなお方向づけているからだ。今日行なわれている無益な紛争の多くは、冷戦の力学と結果の流れを直接くんでいる。

これらの時代を理解しなくてはならない、積極的で強力な理由がもう一つある。冷戦の大きな転換点をもたしたのは、そして核地獄の崖つぶちから人類を引きもどしたのは、ジョン・F・ケネディ大統領とソ連共産党第一書記ニキータ・フルシチョフの政治的気概と勇氣に満ちた行動

だった。二人はそれぞれ独自の方法で、「もうたくさんだ」と宣言した。世界が危機から危機へと引きずり回され、命令を聞いていない馬鹿者たちのせいで恐怖と暗闇につき落とされる現状を、これ以上見過ごすわけにいかないことを、二人は悟ったのだ。ケネディとフルシチョフは、それぞれの周囲の者たちが——浅はかにも、無謀にも、愚かにも、また無邪気にも——世界を壊滅させるような失敗を犯しかねないことを、重々承知していた。私たちは事故や誤算、虚勢、そして人類を全滅の淵に追いつめた一見巧みな戦略的思考から、いかにして自分たちが救われたのか、その経緯を理解しておく必要があるのだ。

本書ではジョン・F・ケネディの驚異の年、アラス・ミラピリス彼とフルシチョフが世界を救い、後継者たちに遺産を、青写真を、そしてインスピレーションを残した、一九六二年一〇月から翌九月までの一年間をふり返る。ケネディは一九六一年一月に、ほとんど経験もなく、選挙で選ばれた大統領としてはアメリカ史上最も若くして就任した。当時の国家指導者の例に漏れず、彼自身は冷戦主義者であり、共産主義が世界に拡大するおそれを前に、アメリカの自由を守る覚悟でいた。しかしその一方で、平和への道を切り拓こうと、就任当初から決意してもいた。だがそこに行き着くまでの道のりは不確かで、ケネディとフルシチョフは、ピッグス湾事件からキューバ・ミサイル危機に至るまで、何度も派手につまずいた。

こうした過ちやつまずき、一触即発の危機はあったものの、またそれらから教訓を学んだおかげで、ケネディとフルシチョフは瀬戸際から引き返し、冷戦の平和的解決へと向かう道を見出した。ケネディは三つの前線で平和を訴えた。一つは、敵でありパートナーでもあったフルシチョ

フ。二つめは、けっして一枚岩とはいかず、重要な問題について意見の分かれることの多かった、アメリカの同盟国。そして三つめは、冷戦にのめりこみ、平和に導くのが容易ではなかった、アメリカの政治体制という前線である。ケネディの平和のための闘^{キヤンペイン}いは、一九六三年夏の数週間に最高潮に達し、歴史的に重要な意味をもつ言動の遺産を世界に残してくれた。

五〇年後というのは、こうしたできごとをふり返り、教訓を学ぶのに適した時期である。もっとも、このプロジェクトが私のなかでかたちになったのは、数年前のことだった。私はケネディの偉大な平和宣言、一九六三年六月にアメリカン大学の卒業式で行なわれた「平和のための戦略」演説に、すっかり心を奪われた。この「平和演説」は、ケネディの最もすばらしい演説という呼び声も一部にはあるものの、就任演説や、平和演説の翌日に行なわれた公民権演説ほどには知られていない。私も数年前世界の貧困問題にとりくんでいた際に出会った、平和演説のことはよく知らなかった。演説は私を深くゆり動かした。その雄弁さと内容もさることながら、地球が今日抱えている諸問題に通じる意義にも心を打たれた。なぜなら演説のなかでケネディは、私たちの最も奥底にある願望——彼の場合でいえば平和への切望——を、具体的な現実に変える方法を教えてくれたからだ。彼はほとんど手法といえるようなものを示した。高い理想を掲げながらも、地に足のついた方法で具体的な成果をもたらし、夢と実行の組み合わせである。

私は二〇〇七年度のBBCリス・レクチャーに、平和演説のこうした驚くべき特徴に関する議論を盛りこんだ。第三講は私の所属するコロンビア大学で行なわれ、最前列の真んなかで聴講してくれた人物のおかげで、本当に特別なできごとになった。それはジョン・ケネディの知的分

身であり、相談役、優れたスピーチライターであった、セオドア（テッド）・ソレンセンその人である。彼は平和演説を起草しただけでなく、そのなかで明確に示された考えや夢を実現すべく、ケネディとともに一〇年にわたって緊密にとりくんでいたのだ。ソレンセンは単なる起草者をはるかに超える存在だった。彼はジョン・ケネディに道義的影響を与えた、知的パートナーだった。平和演説はケネディとソレンセンのコンビが生み出した最も深遠な作品であり、彼らのすばらしさを立証するものである。

この講義を終えたとき、演説を「よくわかっている」とソレンセンのお墨つきをもらい、恐縮した。平和演説が、すべてのケネディの演説のなかでソレンセンの一番のお気に入りだったと聞いて、感激したし、とても嬉しかった。ケネディの外交政策と現代史において、この演説が比類なき重要性をもつという、私の持論が裏づけられたからだ。この演説こそ、巧みに紡ぎ出され、慎重に考え抜かれた言葉が、大きな変化をもたらした実例だった。

その頃私は、ソレンセンのすばらしい奥方で、国連事務総長コフィー・アナンの上級顧問を務めていた、ジリアンと親しく仕事をしていた。テッドとジリアン・ソレンセン夫妻はわが家の隣人でもあり、私と妻のソニアは二人と時事を論じるまたとない機会を得た。そんな折に、私はソレンセンと平和演説について意見を交わし、演説が行なわれた環境について理解を深めるとともに、演説に深い畏敬の念を抱くようになった。私は平和演説のことを本に書こうと決め、ソレンセンに助言と協力を求めた。彼はこの案をとっても喜んでくれ、演説の趣旨とそれが行なわれた経緯、もたらした影響について、ともに執筆することに乗り気だった。悲しいことに、テッド・ソ

レンセンはほどなくして深刻な脳卒中に見舞われた。得がたい才能と道德觀念、經驗、ウィットを備えた人物は亡くなった。彼の協力を得て平和演説に関する本を書くという、私の大きな望みは絶たれた。本書を執筆している間、テッドに電話をかけて指導や意見を仰ぐことができたらどんなによかったかと、何度思ったことだろう！

平和演説が書かれた経緯と環境をふり返るうちに、演説とケネディに対する敬意は深まる一方だった。この平和の希求が、ケネディ政権における最大の業績の一つ、いや現代の世界的指導者による最も偉大な行為の一つを表象していると、私は確信するに至った。もちろん、平和演説が単独で歴史を変えたとか、冷戦を終わらせたなどと主張するつもりはない。それに平和が一人の人間の、ましてや一つの演説の偉業だという印象を与えるのも本意ではない。ケネディ自身、平和を手に入れる、たった一つの単純な方法など存在しないと、演説で述べている。「真の平和とは、多くの国が生み出すもの、多くの行動の積み重ねがもたらすものでなくてはなりません。そのような平和は、静的なものではなく、世代が変わるたび、新しい問題に対処するために変わっていく、動的なものでなくてはなりません。なぜなら平和とはプロセスであり、問題を解決するための手法だからです」。

ケネディの平和演説がいまなお大きな意義をもつのは、それが多くの成果をもたらしただけでなく、より一般に、和平と社会改革のプロセスについても多くを教えてくれるからだ。私たちの世代は新たな課題を抱えており、なかでも重要な課題は、持続可能な開発である。この過密化する世界で、七〇億を超える人々だけでなく、急成長中の世界経済によって激しく痛めつけられて